

香川大学 大学教育基盤センターニュース

No.9 令和2年5月

*Higher Education Center
Kagawa University*

香川大学 大学教育基盤センター
〒760-8521 高松市幸町1-1
Tel 087-832-1151～1154
Fax 087-832-1155
<https://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/>

目 次

1. 2020年度（令和2年度）の大学教育基盤センターの課題について……………	1
2. 就任及び退任のご挨拶……………	2
3. 数理・データサイエンス教育について……………	5
4. 全学共通教育の令和2年度実施に向けた研修会（FD）報告……………	7
5. FDスキルアップ講座報告……………	8
6. 令和2年度新任教員研修会報告……………	11
7. 新ネクストプログラム「DRIイノベーター養成プログラム」のご紹介……………	13
8. 注目の遠隔授業のご紹介……………	14
9. 新スタッフからの一言……………	16

1. 2020 年度(令和 2 年度)大学教育基盤センターの課題について

大学教育基盤センター長 高 橋 尚 志

2020 年は、同時代に生きる者に強烈な印象を残す年として記憶されるでしょう。年明けしばらくしてからはどこもかしこもこの話題で持ちきり、さらにあれよあれよといううちに世界的なパンデミックに。何とか入試はやり終えたものの、十分な形で新入生を迎え入れて新たな年度の授業を当初の予定の通り開始することができなくなってしまいました。学生達は自宅に待機、教職員も可能なものからテレワークに移行する、多少遅れながらも全ての授業を遠隔配信とすることを急ぎ決め、混乱の中 2020 年度をスタートさせたところです。大学教育基盤センターは、多くの授業科目を全学に提供することを主任務としているため、不十分なところはその都度改善しながら学生と教職員のみなさんの声を聞きながらどうかその役割を果たしているところです。充分手が届かないところでご迷惑をおかけした皆さんには心からお詫び申し上げ、授業実施と運営に有形無形のご支援を頂戴した皆さんには心からお礼申し上げます。

突如強いられはしましたが、この新たな条件の下では、いくつかの成果やこれまでは気が付かなかった課題も見えてきています。そしてそれらは、コロナ禍より脱却した後にも活かせる経験だとも感じております。特に遠隔授業を行ったことは、新たな分野や学びの可能性も感じさせてくれるものとなりました。そういった事から考えるならば、以下列挙するセンターの課題それぞれに、新たな角度からの光を当てる機会ともなっていると思われます。

1. 第 3 期中期目標・中期計画の年度計画の円滑な実施
2. 全学共通教育カリキュラムの円滑な実施と DRI 教育の推進
3. 第 4 期中期目標期間に向けた全学共通カリキュラム等の見直し
4. 大学教育基盤センター国際教育部の体制整備と、学生の英語力向上施策の実施：インターナショナルオフィスとの協力共同と TOEIC 得点向上策および TOEIC 300 点未満者への支援
5. ネクストプログラムの現行プログラムと新 DRI イノベーター養成プログラムの円滑な実施
6. 数理・データサイエンス教育の改革を含む ICT 教育の推進と情報リテラシーの円滑な実施
7. 主題 C－基礎科目の円滑な実施および次年度に向けた改善

個々の課題の詳細は省かせてもらいますが、いずれの課題も今年度の着実な実施が求められるものです。センター教職員一同、上述の課題や全学共通教育の円滑な実施に邁進していく所存です。皆さま方におかれては、どうぞよろしくご指導ご鞭撻をお願いします。

1. 就任及び退任のご挨拶

調査研究部長 野村 美加



2020年4月より調査研究部長に任命されました野村美加と申します。平成28年、29年には農学部のカリキュラム副委員長、委員長として教務委員会、平成29年、30年には共通教育コーディネーターの一員として調査研究部会に携わらせていただきました。前任の調査研究部長であります石井知彦教授、角道弘文教授のもとコーディネーターとして参加してまいりました私としては、その後任を仰せつかり責任の重大さに身の引き締まる思いです。

現在、世界中でコロナウイルスが猛威を振るっており、香川大学も日々刻々と変化する状況に対応しております。「全学共通科目」が掲げております「特定の専門にとらわれず、身につけておくべき知識・能力や良識を養う教養教育」は今まさに学生に伝えるべき・教えるべきことのように思います。本年度はコロナウイルスの影響でイレギュラーな授業体制となり、始まる直前から大きな課題を突きつけられております。厳しい環境下ではありますが、この難題に真摯に取り組み、調査研究部一丸となって全学共通教育の点検・評価・改革・改善のための調査研究、そしてそれを踏まえた教育・カリキュラム開発を行ってまいりたいと思います。

最後になりますが私の専門は植物栄養学です。植物が微生物とうまく共存してより良い作物を作ることを目指しております。お察しの通り、調査研究部とは専門が全く異なります。そのため本調査研究部に携わります大学教育基盤センターの教員の皆様をはじめ多くのスタッフの皆様にはご迷惑をおかけすることも多々あるかと存じますが、日々学んでいきたいと思っております。ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

地域教育部長 岡田 徹太郎



2020年度から地域教育部長に就任しました岡田徹太郎と申します。経済学部・教授との併任になります。私の専門は、経済政策・財政学です。

日本全体が人口減少社会に突入するなかで、地域は深刻な衰退の時期を迎えるなど悲観的な未来予測が発表されることがあります。しかし、地域には地域の役割があり、魅力もたくさんあります。そうした役割や魅力を再発見して、資源を十二分に活用していく、地域の活性化のためには、そうした学びと実践が求められています。

実は、地域の役割や魅力は、その社会の外部からはよく見通せるけれども、地域の内部に生きる人は気付きにくいという特徴があります。私自身、21 年前に関東から香川大学に赴任したとき香川に魅了されましたが、香川の人びとが地元の魅力に気付いていないなと感じたことがあります。

香川大学の地域理解教育は、すべての学生に、地域の魅力とその可能性を、1 年生の早い段階から意識し発見してもらうことを目的の一つにしています。早くからその魅力に気づくことにより、それを専門課程でも生かせるようになります。私の研究室でも、地域活性化や地方創生の戦略的な経済政策を提言できる学生が増えてきました。

香川大学の地域理解教育は、一つの転機にあります。国が旗振り役となった地方創生推進事業の一環として、潤沢な資金を使い、人的資源をたくさん投入した時代は終わりを告げました。これまで築いた基盤を継承しつつ、縮小させることのないように進めていかなければなりません。お金も注ぎ込まない、人手もかけない、それでも安定的な地域理解教育を推進する体制を構築する。これが、私に与えられた使命です。すべての皆さまにそのためのアイディアをお寄せ頂きたいと思ひます。それらを一つひとつ実現させていきたいと考えています。

創造工学部 教授 角 道 弘 文



任期満了に伴い、本年 3 月末をもちまして調査研究部長を退任いたしました。ハイドンの交響曲ではありませんが、所掌範囲の広さと深さに驚愕するばかりの毎日でした。

私たちは、一部の政治家のように「やってる感」を演出しさえすればそれで済まされるという楽ちんな立場ではなく、世間に公表される実績にはその根拠を明確に示す必要がありますし、しかもできるだけ計量的に示すことが求められています。調査研究部は、事業を検証することで現状の分析と課題の洗い出しを行い、将来に向けての改善方策を検討するといった、PDCA サイクルで言えば C・A・P を担っています。これらの過程は、中期目標にかかる各年次の実績評価と翌年次の計画策定に直結するものですので、その意味で極めて重要な仕事に係らせていただいたものだと感謝しております。ただ、小職の着任は、全学共通教育にかかる大きな変革が実行された直後でした。たとえば、クォーター制は導入済みであり、それが適用される科目群の検討も概ね見通しが立てられていました。また、文系学生に理系科目を、理系学生に文系科目を履修させる制度も確立されており、「学問への扉」（書物との出会い、自然科学基礎実験）がすでに開設されていきました。さらには、「ヒューマニティーズプログラム」が新たなネクストプログラムとして検討されつつあったタイミングでありました。全学共通教育を巡るこうした状況のなか、2 年間の任期を大過なく全うできたことは、これまでご検討を深めてこられた関係教職員の皆様方のご指導・ご助言の

賜であり、この場をお借りして感謝申し上げる次第です。

全学共通教育のさらなる改革については、第 4 期中期目標期間を見据えた検討が鋭意行われています。学生の視点に立った内部質保証、幅広い学びの具現化などなど、香川大学の全構成員がステークホルダーとして検討すべき課題ばかりです。大教センターの部長職としての任は退きましたが、本学構成員の一員として、微力ながら今後も協力させていただければと存じます。

元地域連携・生涯学習センター長 清 國 祐 二



いよいよこの時がやってきました。2016 年度に譲り受けた地域教育部長でしたが、様々な教職員のお力添えにより、4 年間で全うすることができました。必修化が至上命題となっていた地域理解教育も、e-Learning 科目（主題 C-基礎科目「地域と香川大学」）として達成することができました。実は、本科目の成績処理も最終年度には年間約 2,000 人分をひとりですてしまいました。某局の「誕生秘話ヒストリア」が作れそうですが、今回はやめておきます。主題 C-実践型科目（フィールドワーク）も「地域活動」と「里海から地域の暮らしを考える」の 2 科目を担当しました。終いには主題 C-講義型科目「瀬戸内地域活性化政策その 1・2」の成績処理までやってのけ、主題 C のグランドスラムを達成しました。主題 A でも最終年度は 2 科目担当して、気がつくと大学教育基盤センターには欠くことのできない存在になっていました。そんなことを思うのは自分だけで、私がいなくなれば過去が何もなかったように流れていくのが仕事です。あまり責任を感じずに去って行こうと思います。この挨拶がみなさんの目に触れる頃には、私は独立行政法人教職員支援機構に勤務していて、日本の教育界に新風を巻き起こすべく、これまでと同様にばりばり仕事をしているはずです。ご期待下さい。

このように仕事をやり散らかした後に就任なさる岡田徹太郎先生には大変ご迷惑をおかけいたします。岡田先生のカラーでこの職務に楽しく取り組んで下さい。彼の地より応援しております。

3. 数理・データサイエンス教育について

ICT 教育部長 宮 崎 英 一

平成 7 年に制定された「科学技術基本法」ⁱ⁾により、政府は「科学技術基本計画」を策定し、平成 28 年の第 5 期科学技術基本計画においては、ネットワーク利用の飛躍的發展に伴い、新しい価値やサービスが次々と創出され、人々に豊かさをもたらす「超スマート社会」が未来社会の姿が示されました。

このような社会を世界に先駆けて実現するためには、「数理的思考やデータ分析・活用能力を持ち、社会における様々な問題の解決・新しい課題の発見、データから価値を生み出すことができる人材」ⁱⁱ⁾、すなわち、数理・データサイエンスに対応できる人材育成が大学の急務となっております。

本学ではこれらの人材育成に対応すべく、従来から開講されていた情報リテラシーを、再編し、本年度から新しく情報リテラシーA（全学必修 1 単位）及び情報リテラシーB（全学必修 1 単位）という形で開講する事になりました。情報リテラシーA は主として、学生が最低限必要と考えられるコンピュータ・リテラシーの習得に基礎におきます。例えば、教育学部においては、基本的著作権、レポート・論文作成に必要なワードプロセッサや表計算の活用、卒業論文作成・発表に必要なスキルを身につける事です。

一方、情報リテラシーB においては、「単にコンピュータなどの情報機器の操作ができるということにとどまらず、情報科学や情報工学の観点から、文系理系の専門分野に関わらず身につけるべき数理・データサイエンスの基礎を理解する。これによりさらに高度に情報機器を取り扱う素養を身につける。」ⁱⁱⁱ⁾事を講義目的としています。ここでのポイント^{iv)}は、理系文系に関わらず、全ての学生が受講する事、履修時期が 1 年時であることから、単なる基礎的な知識・技能教育だけでなく、数理・データサイエンスの重要性を理解させるカリキュラムになっている事です。これにより、受講生が将来的に亘って数理・データサイエンスを継続して学習する力が習得出来ると考えられます。

さらに本学では、この情報リテラシーB のカリキュラムを更に充実すべく、大学教育基盤センターに特命助教として藤澤先生にご着任頂きました。藤澤先生は情報リテラシーB のご担当だけでなく、情報リテラシー関連科目全体のマネジメントや DRI（デザイン思考、リスクマネジメント、数理・情報基礎）能力の育成のための調査・分析業務等、様々な分野で日夜大活躍されています。

数理・データサイエンス教育はまだまだ始まったばかりですが、本カリキュラムの受講において、香川大学学生が数理・データサイエンスの力を身につけ、「超スマート社会」をリード出来る人材となる事を期待しております。

参考文献

- i 科学技術基本計画 <https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/index5.html> (2020/05/22)
- ii 大学の数理・データサイエンス教育強化方策について、数理及びデータサイエンス教育の強化に関する懇談会、文部科学省、2016
- iii 情報リテラシーB シラバス 香川大学教務システム https://www2.st.kagawa-u.ac.jp/Portal/Public/Syllabus/DetailMain.aspx?lct_year=2020&lct_cd=083001 (2020/05/22)
- iv 全学共通教育における数理・データサイエンス、林 敏浩、香川大学教育研究、17 巻、pp.21-26、2020

4. 全学共通教育の令和2年度実施に向けた研修会(FD)報告

日時：令和元年 12 月 3 日（火）13:00～16:10

場所：教育学部 331 教室（第1部）、332 教室（第2部）

全学共通教育担当者を対象とした研修会が例年通り実施されました。参加者は第1部 74 名、第2部 41 名と盛況でした。今回は研修会を講演とワークショップで構成する新しい試みがなされました。参加者の反応も上々、有益な機会を提供できたことを喜ぶたいと思います。



【第1部】第1部では、(1)「全学共通科目に関するDRI 教育の新規プログラム及び変更点」（鶴町徳昭創造教育推進部門長、林敏浩前ICT教育部長）、(2)「主題B 科目の実質化とデザイン思考教育」（小坂有資特命講師）、(3)「第4 期中期計画を見据えた全学共通教育にかかる課題の抽出について」（寺尾徹共通教育部長）という3つの講演がありました。(1) 令和2年度からスタートする「DRIイノベーター養成プログラム」、数理データサイエンス教育強化の一環である「情報リテラシーB」についての説明、(2) 全学共通教育とDRI教育との照合の軸となる主題Bでの実践事例、(3) 第4 期中期目標期間に向けた全学共通教育改革のためのWGの活動報告が、上記講演の内容でした。特に、第4期中期目標期間に向けた改革は、今後のセンターの課題として重要です。基本的なコンセプトとして「幅広い学び」がすでに掲げられている点で安心感もありますが、具体的なプランにどう結び付けていくのか、今後いろいろと考えていかなければならないようです。

【第2部】第2部では、経済学部岡田徹太郎教授を講師に迎え、「能動的な「学びの場づくり」を学生役で体験」というコンセプトで、ワークショップが行われました。岡田先生の実際の授業を受けさせていただくような形式で、アイスブレイク、授業内でのグループワークを体験しながら学ぶことができました。会場となった332教室は個別机ですが、固定机と同様な環境が設定され、その環境でもグループワークが可能であることを身をもって学べたことは、参加者にとって大きなことだったようです。また、経済学部におけるデザイン思考教育についてのレクチャーもあり、デザイン教育がモノづくりに限定されない射程を持っていることを知る機会にもなりました。ワークショップ後の質疑応答に活発な議論が交わされたことも印象的でした。



詳細は『香川大学教育研究』第17号所収の報告をご覧ください。以下のURLからPDF版をダウンロードすることができます。(http://shark.lib.kagawa-u.ac.jp/kuir/metadata/28871)

(文責：佐藤慶太)

5. FD スキルアップ講座報告

- 講座名：「学生の学びを促すシラバスの書き方」
- 日 時：令和2年1月6日（月）10:30～12:00
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：葛城浩一（大学教育基盤センター准教授）

本講座は、学生の目線からわかりやすいシラバスの書き方を教授する講座です。シラバスにおける各項目の適切な書き方が詳しく説明されました。特に、「目標」の書き方は具体的な表現例が多く提示され、学生が授業を通してどのようなことを身に着けるのかが明確にわかる記述の仕方が解説されました。また、「目標」と「評価」のつながりがいかに学生の学習意欲を促すかについても説明がなされ、授業計画の重要性が強調されました。さらに、適切に書かれていない「目標」の表現の問題点を指摘し、書き直すという課題に取り組むことで、学生の学びを促す書き方のコツを効果的に学ぶことができました。（文責：ウィリアムズ厚子）



- 講座名：「基礎から学ぶ学習評価法」
- 日 時：令和2年1月6日（月）13:00～14:30
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：佐藤慶太（大学教育基盤センター准教授）

本講座は、学習評価の本来の目的を理解し、授業の目標に応じた適切な評価方法について知るための講座です。学習評価が学生の学習支援、延いては学生の成績の向上と平行したものであるべきという説明のもと、学生の立場に立った具体的な評価の在り方について解説されました。また、学習評価のタイミングの重要性について先行研究の例が示され、効果的な評価について理解することができました。さらに、アクティブラーニングの理論に沿った評価方法の説明がなされ、実践的な知識を得ることができました。

演習では、論述問題におけるルーブリック表の例を参考にしながら、実際に評価の観点と評価のレベルを記述するという課題に取り組み、受講者自身の授業に応用できる内容でした。（文責：ウィリアムズ厚子）



- 講座名：「学生参加型授業の技法」
- 日 時：令和2年1月6日（月）14:40～16:10
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：西本佳代（大学教育基盤センター准教授）

本講座は、アクティブラーニングに基づいた、学生主体の授業形態のあり方についての講座です。ここでは、まず、授業の初めのアイスブレイクの意義とその技法についての説明がありました。次に、講義形式授業と学生参加型授業との比較説明があり、学生参加型の授業についての理解をより深めることができました。また、学生参加型授業が求められる社会的歴史的背景についても説明がなされ、その重要性を認識することができました。後半は、アクティブラーニングに基づいた具体的な学習形態や技法が多く紹介され、授業に生かせる実践的な知識を得ることができました。（文責：ウィリアムズ厚子）



- 講座名：「シラバス・授業を改善しよう！」
- 日 時：令和2年1月7日（火）10:00～15:00
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：葛城浩一・佐藤慶太・西本佳代（大学教育基盤センター准教授）

本講座は、これまでの「シラバスの書き方」と「学習評価法」、「学生参加型授業の技法」の3講座を総合的にまた発展的に学ぶための講座です。アイスブレイクの後、受講者はループリック評価表を参考にしながら実際に自分の授業のシラバスを作成し、その後各自発表しました。後半は、そのシラバスをさらに詳しく記述し、検討を重ねたシラバスを再度発表しました。受講者は最終的により完成度の高いシラバスを作成することができました。（文責：ウィリアムズ厚子）



- 講座名：「事例から学ぶ授業外学修促進のコツ」
- 日 時：令和2年1月7日（火）15:30～17:00
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：小坂有資（大学教育基盤センター特命講師）

学生の授業外学修時間が十分でないことは、本学においても重要な課題となっています。そこで、授業外学修時間が多い授業の事例を紹介することで、一定以上の授業外学修時間を確保するためにはどうすればよいか先生方に考えてもらい、願わくば実践につなげてもらいたい、というのが本講座の趣旨です。紹介された 5 つの事例は、本学の全学共通科目の中で、単に授業外学修時間が多いだけでなく、選択科目でかつ受講者数が多い授業や学生の満足度が高い授業でした。各事例の紹介は、講師である小坂先生による、各担当者への丁寧なインタビューの結果に基づくものであったため、質的には十分であったかもしれませんが、量的には物足りなくもあったというのが偽らざるところです。企画側としては、今後も事例を蓄積し、先生方に「選択肢」をより多く示すことで、一定以上の受講者数を前提とした上で（学生の満足度も得ながら）、一定以上の授業外学修時間を確保するためのお手伝いのできればと考えています。（文責：葛城浩一）



6. 令和2年度新任教員研修会報告

日時：令和2年4月16日（木）9:30～15:55

場所：研究者交流スペース（研究交流棟5階）

【プログラム】

午前の部 9:30～12:00

- | | |
|---------------------------------|-----------------------------|
| 1. 学長挨拶 | 寛 義行（香川大学学長） |
| 2. 香川大学 教育の現状と今後について | 今井田克己（教育担当理事） |
| 3. 研究活動と教員の活動評価について | 片岡郁雄（研究・産官学連携・教員
評価担当理事） |
| 4. コンプライアンスを考える | 真鍋光輝（総務・労務担当理事） |
| 5. 香川大学の地域連携の取り組みについて（産学官連携の推進） | 城下悦夫（産官学連携・特命担当副学長） |
| 6. 各部局からの事務説明 | |

午後の部 13:30～15:40

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 1. 午後の部の趣旨説明 | 石井知彦（大教センター能力開発部長） |
| 2. 全学共通教育運営体制について | 寺尾 徹（大教センター共通教育部長） |
| 3. 全学共通科目の枠組みについて | 角道弘文（大教センター前調査研究部長） |
| 4. 令和2年度全学FDプログラムについて | 葛城浩一（大教センター） |
| 5. スキルアップ講座について | 佐藤慶太（大教センター） |
| 6. 新任教員お悩み相談 | |
| 7. 修了式 | 高橋尚志（大教センター長） |

令和2年度の新任教員研修会が開催されました。令和2年1月22日に中央教育審議会から出された「教学マネジメント指針」においても、「教員としての経験が少ない新任の教員や実務経験のある教員の採用のタイミングで、大学教員に一般的に求められる基礎的な知識・技能や学位プログラムを担う教員として望ましい資質・能力を身に付けさせるためのFD・SDは確実に実施されることが必要」と記載されています。そのため各大学とも新任教員研修プログラムを新たに立ち上げる動きが活発化されていますが、本学では他大学に先立ち、平成30年度から新任教員研修プログラムを本格実施しています。今回は、コロナウィルスの感染拡大防止の観点より、新任教員研修会を中止にするのか、あるいはオンライン等による遠隔形式で実施するのかなどについて、開催前日まで給与福利グループと修学支援グループとで検討を行って参りました。結果的には、新任教員研修会は大変重要なものであると位置付けていることから、今回は密閉・密集・密接を避けるということを条件に対面形式で開催することとしました。午前中には学長の挨拶の後、教育・研究・コンプライアンス・地域連携について、それぞれ担当の理事・副学長から説明がありました。

午後は大学教育基盤センターが全学共通教育に関する説明を行いました。感染拡大の観点から、スケジュールについても当初予定していたアイスブレイクやグループワークを行わないものに内容を変更して実施しました。能力開発部長の説明の後、寺尾共通教育部長と角道前調査研究部長から、それぞれ全学共通教育の運営体制と、全学共通科目の枠組みについて説明がありました。休憩を挟み、葛城教員より FD 受講の意義が説明され、本学で開催される全学 FD のラインナップが紹介されました。さらに佐藤教員よりスキルアップ講座についての説明がなされ、「サイレントダイアログ」という手法を用いてグループワークを進める方法について紹介されました。最後に新任教員お悩み相談の時間が設けられました。今回は会議時間をできるだけ短縮させるという目的もあり、出席された先生方からいただいた質問に、後日回答するという方法を取りました。



新任教員研修会の午後の部は、「新任教員研修プログラム」の受講対象教員に対しては、その受講が必須と定められています。そこで「新任教員研修プログラム」のガイダンスも併せて開催し、どのような内容のプログラムを、なぜ受講しなければならないのかなどについて、背景を含めて説明を行いました。令和2年度の新任教員研修ワークショップは9月10日(木)、11日(金)の二日間、OLIVE SQUAREの多目的ホールにて開催されます。新任教員の皆さんには引き続き参加をお願いします。(文責:石井知彦)

7. 新ネクストプログラムの紹介：DRI イノベーター養成プログラム

今年度から、新しいネクストプログラム（自由参加型の特別教育プログラム）、「DRI イノベーター養成プログラム」が本格的にスタートしました。そもそも DRI とは、Design thinking（デザイン思考）、Risk management（リスクマネジメント）、Informatics（インフォマティクス）の頭文字であり、DRI 教育を通して地域社会に新たな価値を創造することができる人材の育成を目指しています。DRI イノベーター養成プログラムは、より高度な DRI 教育を学びたい学生のニーズにこたえるためのネクストプログラムです。ただし、創造工学部の学生は本プログラムの対象外となります。なぜなら、ネクストプログラムの趣旨は学部での専門的な学びとは別の学びを行うものであり、創造工学部は DRI 教育を基幹としているからです。

DRI イノベーター養成プログラムの目的は、履修した学生が、DRI を通して、あらゆる人間が安心して生活できるためのイノベーションを創造できるようになることです。すなわち、他者に対する共感を基盤とするデザイン思考を活用し（D）、人々が共に幸福に生きる、安全安心な社会の実現を目指し（R）、ビッグデータや ICT をはじめとしたツールを駆使して（I）、現代社会が抱える諸問題を解決し、よりよい社会をつくりだす人材「DRI イノベーター」を育成することを目指しています。

では、DRI イノベーター養成プログラムはどのような仕組みになっているのでしょうか。まず、DRI イノベーター養成プログラムは、D コース、R コース、I コースの 3 つのコースから構成されており、これはそれぞれのコースの目標に従って履修を可能にするための仕組みになっています。その一方で、各コースの共通コンテンツとなる必修科目も存在します。それが、プログラムの入門的な役割を担う「はじめて学ぶ DRI」と、修了演習にあたる役割を担う「DRI イノベーター養成プログラム課題研究」です。

つぎに、修了要件は、DRI イノベーター養成プログラム対象科目を 12 単位以上修得していることです。この 12 単位という数は、1 年次前期から 3 年次後期までの継続した履修をひとつのモデルとして、設定されています。もちろん、12 単位ですべての学びが終わるわけではありません。しかし、本プログラムの履修によって、「DRI イノベーター」になるための、いわば「運転免許」を得ることができる仕組みになっています。このように、DRI イノベーター養成プログラムを通して、DRI に関連する課題を発見し、解決するまでの一連のプロセスを経験することができます。

人口減少や少子高齢化が進行している地域社会には様々な課題があります。これらの諸課題を解決するイノベーションを創出できる人材「DRI イノベーター」を、このプログラムでは育成します。



（文責：小坂有資）

8. 注目の遠隔授業のご紹介

■経済学部開設科目（DRI イノベーター養成プログラム D コース科目）

「まちづくり論」

注目のオンライン講義とのことで学生から推薦を受けて寄稿しておりますが、私自身、オンライン化になって様々なことをトライしている段階のため、それほど変わったことはやっておりませんが、現在取り組んでいることや学生の反応について紹介させていただこうと思います。

私が担当している「まちづくり論」は、主に経済学部2年生以上の科目で165人（うち法学部21人、特別聴講留学生5人）が受講しております。新型コロナウイルスの対策により、経済学部では主にZoomを用いたオンライン講義へとシフトし（ご尽力いただいた先生方、事務の方々、ありがとうございました）、学生達の情報リテラシーも高く、思ったよりもスムーズにオンライン化へと移行しました。講義を担当する教員にとっては、まさに新たなチャレンジ！でして、特に第一週目は経済学部の教員がそれぞれのオンライン講義での問題点等をいち早く共有して、対策を議論し、これまでにない（？冗談です）協力関係は感動的でした。このように、学部教員一体となったオンライン化への第一歩があったおかげで、私自身の講義でも様々なことをトライすることができています。

まず、私自身がトライしたのは、受講生も含めて可能な人は全員カメラオンをお願いして講義を進めていきました。通常の講義室では全員顔が見える状態が当たり前で、むしろフェイスマスク等をして講義を受けるのは異様ですよね、と学生達に話し、オンラインでも顔が見える状態で始めてみました。心配していた学生達の反応は、緊張感を持って講義を受けられた、オンラインでも講義に集中できた、とポジティブな反応が多く、教員も学生の表情を見ながら講義が進められるため、第二週まではこの形式で進めてみました。しかし、GW明けに全学のほうでオンライン講義の方針が出され、大講義では原則カメラオフとなり、私自身もオンライン講義では致し方ないという思いもあったため、次の講義でカメラオン・オフは各自の判断で、と学生達に周知したところ、現在は私以外全員カメラオフとなっております。

その他、いまのところオンライン講義で特に良かった点は、Zoomでのチャットとmoodleとの連携です。まちづくり論では、まちの景観や風景などの画像を見せることが多く、学生達にチャットでどんどん反応ください、と伝えたうえで講義を進めていくと、これまでの講義室スタイルでは聞き取れなかった小さな反応がチャットで掬えるようになり、会話形式で大講義が進められていることは私にとっても発見でした。また、moodleとはとても相性が良く、賛否を問うような質問を投げかけ、moodleで回答してもらい、ライブで回答結果を示してコメントしていく、といったこともやりやすくなりました。もちろん、これは講義

室でもできますが、同じ講義室から 100 人以上がつなぐと moodle につながる時間も長かったため、現在のオンライン講義の方がスムーズにできております。

以上、簡単な紹介となりましたが、他の講義も含めてオンライン講義に対する学生達の反応は概ね良好で、今後も（ゼミ等以外は）オンライン講義が良いです、といった反応もちらほらあり、これから先、大学の講義はどうなっていくのか、オンライン講義特有の疲れを感じながら、次週以降の講義準備に勤しんでおります。（文責：西成典久）

9. 新スタッフから一言

大学教育基盤センター 特命助教 藤澤 修平



令和2年4月1日より大学教育基盤センター特命助教として着任しました、藤澤修平と申します。

私は生まれも育ちも香川の人間で、香川大学工学部信頼性情報システム工学専攻科（修士課程）を修了後、香川大学工学部実験実習係、防災教育センター等の勤務を経て、昨年度までは四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構の危機管理先端教育研究センターに技術補佐員として勤めました。前職では主に遠隔講義システムを用いた講義支援や教材開発、演習・実習の補助業務に携わっていましたが、この度ご縁がありまして、情報リテラシーや DRI 教育等、ICT を活用する教育に関わる業務を担当させていただくことになりました。

香川県民らしく讃岐うどんが大好きで、毎日の昼食となっています。大学生時代から定期的に県内のうどん屋を巡っており、500軒を超える店舗について独自に集計・評価を行っています。皆様の県内出張の際にお声がけいただければ、付近の美味いうどん屋を紹介いたしますので、ぜひご活用(?)ください。とりあえず「情報とうどんに明るい人」と覚えていただければ間違いはございません。

昨今の世界を取り巻く事情により、大学の講義形態は大きな変化を強いられ、香川大学も当面の間オンラインによる遠隔講義が原則となりました。未だ先行きが見えない状況ではありますが、これを機に講義の質を向上・最適化すべく、今後様々な取り組みが試されるものと考えます。私は教員となって日が浅いため、不慣れで何かとご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、皆様に貢献できるよう身を粉にして業務に取り組みますので、以後ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

大学教育基盤センター 特命講師 Gareth Perkins



生年月日 1984 年 1 月 23 日。 イギリス、ノーサンプトン生まれ。大学でヴィジュアル・コミュニケーションを専攻し卒業した後に来日し、英会話講師を 4 年間勤めました。

2008 年にイギリスに戻り、オックスフォードブルックス大学でクリエイティブ・ライティングの修士号を取得した後、再び来日し今日まで英語講師を勤めております。

趣味は作曲や物語の執筆、絵画などです。よろしくお願いいたします。



4 月 1 日に大学教育基盤センターの特任講師として採用されました
アンドリュー コールドウェルと申します。1995 年に来日して以来、
岡山大学や鳥取大学などの国立大学で教えてきました。大学での授業
の他に、県の教育委員会や全国語学教育学会（JALT）で研究発表をし
ました。内容は主に、生徒と教師のモチベーションや両者の共同作業
による学習法、また最近では、教育文化意識についてです。

学生の皆さんが、英語を用いてコミュニケーションをし、国際的な知識を得るとともに、
日本の豊かさに文化遺産を世界に伝えることができる ‘Global Citizen’ となるように、努
めていきたいと思っています。

現在は、妻と 3 人の子供とともに岡山県に住んでいます。香川県は近いため何度も訪れた
ことがありました。今後、香川大学の職員や教職員の皆さんと親交を深められることを楽し
みにしています。よろしくお願い申し上げます。

Andrew Caldwell, was appointed lecturer within the University Education Board Center on April 1st, 2020. I moved to Japan in 1995, and I have taught at national universities, such as Okayama University and Tottori University. In addition to teaching, I have made presentations for the The Japan Association for Language Teaching (JALT) as well as the prefectural Boards of Education. Most of my speeches focused on student and teacher motivation, collaborative learning techniques, and most recently, teaching cultural awareness. I want to encourage and inspire my students to become ‘Global Citizens’. I hope that they view English as a tool to help them communicate and learn about the world, but also to teach others about the rich culture and heritage of Japan. My family consists of five members, my wife, my three children, and myself. We live in Okayama, which is not far, so we have visited Kagawa prefecture quite a few times. I look forward to getting to know all my fellow colleagues at Kagawa University, and I kindly welcome your support in the future.

教育・学生支援部長 高 嶋 実

4月1日より、教育・学生支援部長を拝命した高嶋実と申します。就任して1か月余ですが、既に失敗の繰り返しです。皆様の支えがあって日々過ごせている感じです。何の取り柄もありますが、地元出身ですので、香川大学のためという気持ちだけは持っています。他方、自分は他大学の経験が少ないので視野の狭いところが欠点だと思っています。変なことを言っていると感じたら、どしどし注意してください。直します(^^);

これから大学教育基盤センターのお役に立てるように頑張りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

教育・学生支援部次長（併任）修学支援グループリーダー
近 藤 ま ゆ み

令和2年4月1日付けで教育・学生支援部修学支援グループリーダーに就任しました近藤まゆみと申します。

3月末までは情報グループで、総合情報センターが提供する香川大学 Gmail などの各種サービスや Wi-Fi などの基盤システムに従事していました。農学部で学務担当、学務グループにも在籍していた経験がありますが、いずれも20年以上前ですので、新制度などを早く習得し、大学改革・教育改革も少しでもお役に立てればと考えております。また、この度の新型コロナウイルス対応は初めての経験で、4月は刻々と変わる情勢に翻弄されましたが、スタッフに助けられながら大学内の方々の協力連携を今まで以上にありがたく感じております。

なにかと行き届かないところもあるかと思いますが、今までの経験を生かし大学教育基盤センターの業務に関わっていく所存ですので、どうぞよろしくお願いいたします。

修学支援グループチーフ 島 明 日 香

令和2年4月1日付けで教育・学生支援部修学支援グループに配属されました島明日香と申します。

3月までは医学部キャンパスにて勤務しておりましたので、キャンパスも変わり新たな気持ちでがんばりたいと思っております。現在は新型コロナウイルス流行のため、様々な新しい対応が必要となっておりますが、学生みなさんが安心して学修を続けることができるよう最大限手助けをできればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



原稿を募集しています。

☆全学共通科目を担当して感じたことや意見等があれば、是非投稿してください。

★各学部が取り組んでいる教育改革も、積極的に取りあげていくつもりです。

☆宛先は、紀要編集委員会（修学支援グループ）までお願いします。